

桜並木

題字： 桃山勝 様

デイケア新港ご利用者様



／ おめでとうございます！ ／

毎月出版されている『月刊 DAY』という書籍をご存知でしょうか？
多くの通所サービス事業所で定期購読をされているのですが、今回『月刊 DAY』主催の**第18回塗り絵コンクール**に、デイケア新港のご利用者、**穎川 康英様**が応募されたところ、見事**インパクト賞**を受賞されました。応募総数は何と約2,500通！！
「とても個性的でインパクトのある色使い。空にある模様は楽しく、ワクワクした気持ちにさせてくれます」という評価をいただきました。これからも製作に取り組んでいただいてどんどん応募していきましょう。そして狙うはグランプリ受賞！その時は、この誌面に大々的に掲載しますので皆様お楽しみに。

桜並木

第42号
平成30年6月



医療法人
秋桜会

〒851-2211
長崎市京泊3丁目30番3号
TEL 095-850-6866
FAX 095-850-4888
WEB www.cosmos-garden.com

 **facebook** もご覧ください 

公式サイトへ
QRコードで
簡単アクセス



cosmos-garden

誰にでも思い出の1曲は あるものです



ふれあいコンサート

コスモスガーデン桜の里



すっかり恒例となった『中山音楽教室
ふれあいコンサート』。

5月13日、コスモスガーデン桜の里にて開催されました。歌、フラダンス、舞踊を披露してくださるなど、会場は和やかな雰囲気に包まれました。

「歌は世につれ、世は歌につれ。時代を超えて語り継ぎたい歌がある」と言いますが、聞き覚えのある歌が流れると自然に手拍子をうつ入所者様も。世に流行していた歌は、人の思い出とともに覚えられ、後にその時の記憶を鮮やかに蘇らせてくれるものですよね。

皆様にとって思い出の一曲は何ですか？

感謝の気持ちを デザートで表現

プリン・ア・ラ・モードはいかが？

デイケア新港



5月13日は「母の日」でしたね。

デイケア新港では、11日に母の日感謝イベントを開催。日頃の感謝の気持ちを表すのに「カーネーションを贈るのは定番すぎるな～」と考えたスタッフ。「いつもよりちょっと贅沢なデザートをご利用者様と一緒に作ろう！」と思いつきました。それは昭和のスイーツの王道「プリン・ア・ラ・モード」！「ア・ラ・モード」はフランス語で「最新の」「流行の」という意味だそうです。オシャレじゃないですか！！

カスタードプリンを器の中心にセットし、箸を使って果物を添え、生クリームで飾り付けをし、仕上げにさくらんぼを乗せて完成！その出来栄えに思わず「トレビア～ン」と声があがったかどうかは？？

さっそく皆様でいただきました。「う～ん美味か！」との声をいただくも、せっかくですから長崎弁でなく、フランス語で…あれ？フランス語で「美味しい」はなんていうのですか？ご存知の方は教えてください（笑）。



グループホームのある日

グループホーム新港 2 階にご入居中の北山様のご趣味は絵を描くこと。雑誌などで見かけた写真を原画とし、そこに基準となる線を引きます。次に原画を画用紙にのせ、書き込んだ線を延長するように画用紙に線を書き込みます。画用紙に書いた線を目安に原画を書き写し、色鉛筆で色づけすれば完成！（伝わりましたか？）

題材にする人物が多彩。「11PM」「クイズダービー」などの人気番組の司会者として活躍した大物タレントやバンクーバーオリンピック女子フィギュアスケート銀メダリスト、さらには勝新の愛称で親しまれた俳優が演じる座頭市などなど。

お部屋の壁に作品が飾られているのですがその中でひときわ目についたのが、プロボクシングで世界 6 階級制覇を果たしたフィリピンの英雄。なぜプロボクサーを描こうと思われたのか？ご本人に何うも恥ずかしそうにされ、詳しくはお聞きできませんでした。これからも描き続けてくださいと言おうと思ったら、今は読書に集中されているようで、新作はしばらく完成しないようです…。

題材に選ぶ人物が多彩

グループホーム新港 2 階



北山様の
作品です。



鯉のぼり製作

グループホームコスモス 2

5 月 5 日は皆様ご存じの通り、こどもの日、男の子の成長を祝う端午の節句です。グループホームコスモスでも大空に向かって鯉のぼりを掲げたいのですが、建物の構造上実現が難しいので断念…。そこで入居者の皆様と一緒に手作りの鯉のぼりを製作することを思いつきました。

100 円均一のお店で大き目の紙コップを購入。ハサミで底を切って、コップの側面に色紙を貼りつけると、色とりどりの鯉のぼりが完成。紐を通してリビングの壁に飾りましょう。これなら気分に左右されず、24 時間鯉のぼりが楽しめますね。

ある入居者様はコップを切りながら「これにビールを入れて飲んだら美味かろうね～」と一言。その意見に賛成ですが、全部底を切っちゃったのでビールはつけないのでした…。



連載小説

『僕の暗い青春』

作者：井下長治

※このお話は、フィクション？です

前回までのあらすじ 昼休みに屋上に呼びだされ、山上一派による敵討ちを受けたボク。教室に戻っても先生は深く訊ねようとしない。「たぶん関わりたくなかとやろうな…」と思いながら机に伏せて眠るボクだった。

▼初体験の集団リンチ事件から 3 ヶ月が過ぎようとしている。心と体の傷も癒えた 2 ヶ月程前から杉尾君に誘われボクは柔道を始めた。この頃には中田、二ノ瀬という柔道部両エースを除いた他の部員たちとはそこそこの勝負ができるようになっていた。ある日乱取りをやっていると「よ～し、そこまで！ 3 年は上に 1、2 年は下に座れ。」顧問の里道先生が声を上げる。「1、2 年は順に自分が指名した 3 年生と対戦してみろ。え～とそこの 1 年、名前はう～ん、あっそうそう益田、お前から行け。」唐突な指示である。一見して気弱そうなこの 1 年坊主は家が近所で、柔道の実力も受け身がやっとならなくなった程度であった。彼は顔見知りの安心感から経験の浅い人間の実力を軽視したのか知る由もなかったが、ボクを指名してきた。礼に始まり礼に終わる柔道である。練習試合であろうとも両者姿勢正しく対峙し、「お願いします」と一礼の後、組手となる。「はじめ！」顧問の号令でボクが一礼しながら「お願いします」の声を上げようとした刹那、「いただきます～す！」。道場に轟くとともにこの貧弱少年が発したとは思えない大音声に部員一同啞然の後の大爆笑。生真面目でほとんど冗談など言ったことのない里道先生は無表情のまま「静かにせんか、ほら早よせんか」とボクらを促す。足払い、袖つり込み、大外刈り、矢継ぎ早に繰り出すボクの技にこの貧弱少年は粘り強く耐え、ついに引き分けた。「な～んしよとや長治、そげん、ずんだれとっけん山上達にやらるっとぞ。」誰かがそう言い放つ。ムっとして声のした方を振り返ろうとした時、それまで目を閉じたまま両の腕を組み胡坐し続けていた道場主が口を開く。「ごちそうさまはせんとか？」居合わせた殆どの者が我が耳を疑った。冗談を好まない師匠の口から出た言葉ではあっても、今のはまともに受け取り難い。師匠は目を閉じたまま、「ムフムフ」と奇妙な笑い声らしきものを時折発した。あれはやはり冗談だったのだろう。よほどツボにはまったのかその後も小一時間ほど「ムフムフ」は続いた。▼1、2 年の 15～6 名が一通り練習試合を済ませたところで本日の部活は終了となった。後輩に見くびられたボクに、貧弱少年以外からのご指名は全く無く腐っていると、学校から帰る道すがら杉尾君が話しかけてくる。「もうすぐ昇段試験のあつとは知っとるね？」「知らん。ワイ、なんか受くっとか？」「うん、こん前はダメやったばってん、今度は絶対受かるやろうて思う。長治君も受けてみんね？」「オイが受かるワケなやかやっか、まだ 3 ヶ月もせんとに！」本心で話すボクに杉尾君はなおも説得を続けた。どうやら彼は一人で受けに行くのが心細いようである。暫しの後、渋々ながらボクが承知すると彼は喜々とした笑みを浮かべた。昇段試験までの 3 週間、杉尾君は得意の内股に磨きをかけ、得意技を持たないボクは相手に技をかけさせない防御と一瞬の間隙をついて膝にタックルし両足をすくって倒す（技の名前など知らない）訓練に没頭した。▼光陰矢の如く、彼の日はすぐに訪れる。朝から迎えに来てくれた杉尾君と共に試験会場に向かうボクの胸ポケットには百円札 8 枚が大事にしまわれていた。ひと月のお小遣いの半分に近い額の受験料である。絶対に無駄にはできない。情けないことにボクの頭の中はそのことだけでいっぱいである。会場に到着し受験料を支払うと、6 人 1 組の班に分けられ、班内総当たり戦で 4 勝すれば初段に合格となる旨の説明があった。ボクが入れられた班は高校生 3 人、中学生が 3 人おり平均的な構成である。緊張感が走る初戦、ボクは《八百円、八百円》と唱えながら試合に臨んだ。右の自然体でやや腰を落とし、襟と袖口を掴んだ両腕に渾身の力を込めた。腕力には自身がある。相手の高校生はさかんに技をかけてきたが、腰を落として懸命に踏ん張る相手にはなかなか思い通りに事は運ばなかった。痺れをきらしてボクを睨みつけ「そがんとしたら、柔道にならんやろう」と凄む。そう脅された瞬間、好機到来とばかり、高校生の足下に飛び込み両の膝をしっかり抱え込み頭から相手の腹に思いっきり突っ込んだ。彼は堪らず背中から落ち、一瞬息も詰まりそうになった。先ずはめでたく一勝。段違いの技量をもった高校生に鮮やかな一本背負いを決められた以外は鉄壁の防御と隙をついたヘンテコ技の特訓が功を奏し、ボクは辛うじて昇段試験に合格してしまった。▼もし、今の感想はと尋ねられたら、「よ～し、八百円取り返し！」に尽きた。自分よりも明らかに技能に優れた杉尾君は今回も 3 勝にとどまり無念の不合格である。ボクの合格がひどく妬ましかったのか「組み合わせの良かったら初心者でも受かることあつとバイね…」ぽつりと本音を漏らした。明日の部活ではボクは黒帯、彼は茶帯。想像すると表情がほころびそうになる反面、少し気の毒でもあった。「杉尾、初段は逃げんとやっけん、また頑張ればヨカやっか。」慰めの言葉は一層彼のプライドを打ちひしぐ…。(つづく)